
アノ日ノ紅葉

花梨糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アノ日ノ紅葉

【Nコード】

N1540U

【作者名】

花梨糖

【あらすじ】

赤毛の女の子とそれに愛された男の子。
をした女の子。

【サロメ】のような恋

(前書き)

ヤンデレ(?) 注意!

入学式に彼と出会って私は変わった。

生まれつき髪の色が赤っぽくてよく笑われていた私。気弱で人と話すのが苦手な私は彼に近づきたくて自分を偽り始め、クラスの中心になった。

けど、得たものは途方もないストレスと激しい恋慕。

学級委員に抜擢され毎日雑用ばかり。

きちんと仕事をして誰も何も言わない。失敗した時だけ執拗に責め立てる。

そんな毎日に嫌気がさしていたにも関わらず私が学校に通う理由。それが彼。

放課後の教室。それぞれがこの後どうするのか決めかねているところであった。

「悠木くん、みんなでカラオケ行くんだけど行かない？」

「おっ、行く行く！」

彼、悠木直哉君はクラスの女子に誘われて上機嫌だった。

悠木君はみんなの人気者。明るく親切でかっこいい。しかし、少々軽いところがあり女子をとつかえ引つ変えているという噂すらある。

出会ったときと印象は違ったけれど……それでも好きだった。

私はゴミ箱を元の位置に戻し帰る準備を進める。そこに、悠木君が近づいてきた。

「小川、お前もカラオケ行く？」

「えっ……ご、ごめんね、私今日用事あって！」

「そっか、じゃあまた今度行くとき誘うな」

爽やかな笑みを浮かべ女子たちとカラオケに向かう。

用事なんてない。悠木君が、ほかの女子と仲良くしているのを見たくなんかないからだ。

どうしたらこの想いが伝わるの。どうしたら悠木君は私を見てくれるの。

家に帰り本棚から適当に選んだ本をベッドの上で読む。

サロメ。褒美にある男の首を所望した女のお話。

『お前は死んでしまつて、お前の首はもうあたしのものだもの。どうにでもできるのだよ、あたしの気のすむように。犬にでも、空飛ぶ鳥にでも投げてやれるのだよ。犬に食べさせた残りを空飛ぶ鳥がつくだろう……。ああ！ヨハネ、お前一人なのだよ、あたしが恋した男は』

昔読んだ時はよくわからなかった。
でも、今ならわかる気がした。

放課後、部活で賑わうグラウンド。

それとは正反対の静かな校舎裏。悠木君はそこで蹲っている。
綺麗な夕日が彼の白いベストを染めていた。

赤い、綺麗な色づき。

「悠木君……」

「なん、で……お、がわ……」

赤く染まるベストは夕日だけではなかった。

彼の、愛しい悠木君の血。

「悠木君、私だけを見てよ。私、悠木君のこと大好きだよ」

手に握っているナイフで悠木君の喉を刺す。赤い血がどくどくと流れ出る。

「初めて会った日から私は悠木君をずっと、ずっと見てたのに。」

悠木君はほかの女の子が好きなんだもんね」

グリグリとナイフで肉をえぐるような感覚。不快感どころかある種の幸福すら感じていた。

悠木君はうめき声だけしか出せないのか何をつているのかわからない。

「サロメって知ってる？ 愛する男の生首に口づけするんだよ。私、悠木君の首が欲しい」

猫なで声で悠木君の首をそつとなぞる。

「悠木君がいけないんだよ。でも大丈夫。これからはずっと 鮮血が舞い散る。夕日と交じり合ってそれはまるで……。」

『お前それ地毛？ すげーな！ 綺麗な色』

『き、綺麗じゃないよ……みんなと違うし……染めるもん』

『ええー、もったいないぜ！ うちの学校は校則ユルイしせっかくなんだからそのままのほうがいいって！ 少なくとも俺はその髪の色好み』

いつも馬鹿にされたこの髪の色をあなたは好きだと言ってくれた。疎ましいこの髪の色。あなたが好きだと言うならば天からの贈り物に思えたの。

『俺、悠木直哉。お前は？』

『私は……小川』

オカワモリツ
小川紅葉。

そして彼は名前と髪が合っていていいなと笑った。
その時、私は気づいた。好きになったのだと。

サロメの気持ちが変わってしまった。
愛する人の首を掻き抱いて私は微笑む。

「ああ、悠木君……私の愛する人……もうこれで大丈夫ね」

私の赤毛は更に赤みが増し、夕日と溶け合っているようだった。

(後書き)

なんとなく書きたくなくなった。オチもヤマもありません。紅葉狩りにいつか行きたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1540u/>

アノ日ノ紅葉

2011年10月9日01時32分発行